

文徴明と石湖：1530年代の作画活動と文人意識の成熟

都甲，さやか

<http://hdl.handle.net/2324/1440979>

出版情報：Kyushu University, 2013, 博士（文学），課程博士

バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



論文審査の結果の要旨

本博士論文は、中国の呉派文人画壇の中心人物としてしられる文徵明（1470—1559）の文芸活動について、絵画史研究の立場から1530年代の石湖をめぐる諸作例を中心に考察し、文徵明が画技と意識の両面において文人としての成熟を獲得していく過程を、はじめて明らかにした労作である。

第1章では、文徵明の画作全般を年代順に整理し、直接の師であった沈周（1427—1509）の教えのもとで文人画家としての画技と意識を身につけ、それが、北京任官から帰郷してまもない1530年代にはじめられた本格的な画作において、文徵明が文人画家としての歴史的立場を自覚する上で大きく作用したことを明らかにし、第2章以後の議論の前提を準備する。

第2章及び第3章では、石湖の名勝としての場の記憶を歴史資料から網羅的に検討した上で、文徵明の北京任官の前後に描かれた2点の石湖図をとりあげ、両者における絵画表現と制作背景の違いを明らかにする。具体的には、1514年制作の詩巻に画卷を補作して1520年9月に成立した《石湖花游曲詩画卷》（上海博物館）が、元時代の玉山雅集のメンバーによる石湖での雅会を念頭に制作され、それを鑑賞者に想起させるべく視点などが選択されているのに対し、12年後の1532年7月に制作された《石湖清勝図巻》（上海博物館）が過去の特定の雅会に制約されない、むしろ石湖にまつわるあらゆる記憶を、鑑賞者に想起させる理想像として石湖を表象しているとする見解を提示している。続いて、二つの石湖図に付随する識語と跋文の精読をとおして、文徵明ばかりでなく、その友人の王守・王寵兄弟、子息の文彭・文嘉らに代表される石湖をめぐる文人サークルにおいて、名勝が文人に作用して芸術を揺籃し、芸術によって場の品格が高まるとする考え、さらには、東晋の王羲之（303—361）の《蘭亭序》に示される、芸術こそが時代を超えて存続していくとする考えが意識され共有されていた事実をはじめて重要な課題として解明し、文徵明が、時代を超えて石湖の勝を伝えうる不変かつ普遍的な性格を帯びる石湖図の制作に意識を向け、その思いを作品として結実させたのが《石湖清勝図巻》であったとする魅力的かつ説得力に富む結論を導いている。

第4章は、1532年7月の《石湖清勝図巻》に加えて、1530年7月の《倪瓚江南春詞意図巻》（上海博物館）、1531年4月の《松壑飛泉図》（台北故宮博物院）、1532年10月の《関山積雪図巻》（台北故宮博物院）の3点の1530年代の代表作を分析の対象とし、文徵明が自身の作品の内部に黄公望・王蒙をはじめとする元末四大家の造形語彙を自覚的かつ積極的に引用していることを明らかにしている。とくにこれらの代表作がいずれも4年をかけて完成をみた《関山積雪図巻》の制作の途上で為されたことに注目し、総合的な分析を行った点は高く評価され、この間に、文徵明が文人画家としての系譜、蘇州をめぐる文人としての自身の立ち位置への明確な意識に目覚め、過去の規範とすべき先達の画業を見出し、それらに肉迫し、さらに凌駕しようという自負心に裏付けられていたと解釈を行う説得力ある結論を導くことに成功している。文徵明の文人意識のより深い解明には、詩文、書の方面からの今後の検討も期待されるが、イメージの解読と作品に付随する識語、題跋、画賛の精読とを関連づけるオーソドックスな手法と場のコンテクストに注目する今日的な美術史研究の手法を併用することで、この文人画の巨匠の歴史的な意義に肉迫した本論考は、新知見に富み、文徵明の果たした功績に魅力ある新たな視点を加えるもので、国際的な広がりをもつ今日の中国絵画史研究においても、十二分に評価できる充実した内容となっている。

よって本調査委員会は、本論考の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力をもつものであると認めるものである。